公立大学法人　滋賀県立大学

地域づくり教育研究センター　年報

Annual Report of
Center for Community Development and Planning
The University of Shiga Prefecture

no.1 ——— 2011.3

目次

1. 学長あいさつ 2

2. 地域づくり教育研究センター概要 3

2-1. 地域づくり教育研究センターのミッション 3

2-2. 本センターの機能 3

2-3. 本センターの体制 4

3. 事業紹介 5

3-1. 事業一覧 5

3-2. 受託研究 8

3-2-1. 湖国まるごとエコ・ミュージアム推進業務 8

3-2-2. 多様なコミュニティ・プラットフォームをつくろう 10

- 地域の総合力を生かす連携・協働の場や仕組みづくり -

3-2-3. 都市と地方の交流居住・移住促進事業 12

3-2-4.「地域における人材の受入体制の整備に関する調査・研究」事業 14

3-3. 研究活動支援 16

3-3-1. 学生地域活動サポート講座 16

3-4. 人材育成 18

3-4-1. 琵琶湖塾 18

3-4-2. スチューデントファーム「近江楽座」ーまち・むら・くらしふれあい工舎 20

3-4-3. 近江環人地域再生学座 22

4. 研究員、職員メッセージ 24

5. 資料 26

5-1. 琵琶湖塾開催実績 26

5-2. 春・秋・移動公開講座開催実績 27

5-3. 近江楽座採択プロジェクト一覧 30

1. 学長あいさつ

滋賀県立大学は、滋賀県の学術の中心として広い視野と豊かな創迫力を備えた人材を養成するとともに学術研究を通じて地域社会に貢献することを目指して平成7年に開学しました。その後、大学を取り巻く環境が大きく変化したこともあって、平成18年に社会の動きに迅速に対応することができる公立大学法人へと移行しました。その際、本学が目指す「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」活動を支援するために、県内の地域の調査研究にシンクタンクとして携わってきた（財）滋賀総合研究所を引き継いで、「地域づくり調査研究センター」を設置しましたが、平成20年に大学の教育研究活動をより積極的に社会貢献に結びつける拠点として「地域づくり教育研究センター」に改組したところです。

本学では、10年後のあるべき姿として「教育を重視し、学生の満足度が高い大学」、「社会のグローバル化や時代の変化をとらえた大学」、「地域や産業界と連携し、創造的な研究に取り組む大学」という姿を描き、それに向けて教育、研究、社会貢献、国際化に取り組んでいます。本センターがこれまで行ってきた事業や活動をさらに発展させ、将来構想に沿って滋賀県立大学が社会の中の大学としての役割を果たすために一翼を担うことを期待しています。

平成23年3月
公立大学法人　滋賀県立大学　学長
曽我　直弘

2. 地域づくり教育研究センター概要

2-1. 地域づくり教育研究センターのミッション

滋賀県立大学は、平成18年4月に地域調査と地域政策づくりを担う「地域づくり調査研究センター」を開設し、平成20年4月には生涯教育機能、学生の地域での学びを支援する機能を充実させ「地域づくり教育研究センター」として発展させてきました。

当センターは、「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」という本学の使命を遂行するため、大学の知を広く地域社会に還元するための生涯学習事業をはじめ、地域づくりに関する調査研究、地域社会で活躍する人材の育成などに取り組み、地域に開かれた大学としての役割を担っています。

この年報は、地域づくり調査研究センターとしての2年間（平成18・19年度）と地域づくり教育研究センターとしての2年間（平成20・21年度）の活動成果をとりまとめたものです。地域社会の変化とそれを受けた大学への期待の変化に対応して、当センターの事業も進化させていかなければならないと覚悟しております。皆様方のご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

地域づくり教育研究センター長
仁連　孝昭

2-2. 本センターの機能

1. 地域づくり調査・研究事業

地域づくりに関する先進事例を収集・分析するとともに、地域づくりのあり方を模索し、方向性を提案します。また自治体、NPO、経済団体等と連携し受託研究を行うとともに、地域の活性化に向けた自主研究を行っています。

・受託研究事業
・自主研究事業

2. 生涯学習事業

県民の生涯学習に資するため、毎年春期と秋期に公開講座（連続講座）を開催すると共に、大学の授業を開放する公開講義等を実施しています。

・公開講座の開催
・公開講義の実施

3. 人材育成事業

学生による地域づくり活動を支援するとともに、地域づくりのリーダーとなる人材を育成し、地域に輩出する取り組みを行っています。

・琵琶湖塾開催事業
・近江環人地域再生学座の運営
・近江楽座の運営
・地域づくりセミナーの開催

4. 地域づくり情報の収集発信

地域づくり、まちづくり活動について情報発信を行うとともに、地域づくり情報誌を発行しています。

5. 研究・活動支援

本学学生、教員、地域住民、NPO、自治体等との協働による地域づくりに関する研究・活動を支援します。

・近江楽座Bプロジェクトの実施
・学生地域づくり活動サポート講座（まちづくりインターシップ）の開催

※当センターでは、上記以外にも以下の活動等に、取り組んでいます。

・ 大学の地域交流・学術交流
・ 環びわ湖大学・地域コンソーシアムによる大学地域連携

2-3. 本センターの体制

センター長（理事・副学長）	仁連孝昭	(専門：エコロジー経済学)
特任教授	奥貫隆	（専門：景観計画）
地域貢献グループ統括	久保田貢	（事務総括）
主幹	澤田純子	（地域産学連携センター）
○主幹（専門調査研究員）	秦　憲志	（調査研究・近江楽座・琵琶湖塾・知的財産関連他）
主査	大澤孝史	（地域交流・学術交流・生涯学習事業他）
主事	青笹千絵	（科学研究費・その他競争資金他）
職員	大野木勇夫	（生涯学習事業）
職員	池田恭子	（センター事務）
職員	内堀明子	（センター事務）
○職員（嘱託調査研究員）	古田ゆか	（調査研究・琵琶湖塾他）
職員	山崎弘	（琵琶湖塾・大学サテライトプラザ他）
○特定プロジェクト研究員	上田洋平	（近江環人・調査研究他）
○特定プロジェクト研究員	近藤紀章	（近江環人・調査研究他）
職員	桂田佳寿美	（近江環人・センター事務）
職員	上川七菜	（近江楽座）

（○　調査研究担当）

平成 22.4.1 現在

3. 事業紹介

3-1. 事業一覧

項目	事業名称	実施年度
自主研究	**滋賀県市町村における地域再生計画の現状と課題に関する研究 (※地域再生研究会)** 社会経済状況が一層厳しさを増し、また、環境問題が世界的な課題になる中で、滋賀が有する豊かな自然･歴史･文化や資源などの地域特性を活かした地域活性のあり方を明らかにし、これからの滋賀の持続的な発展に寄与するため、研究会やフォーラム等の活動、また研究紀要等の発行を行います。 	平成 18 年度～継続
	滋賀県におけるまちづくりのための基礎資源に関する調査研究	平成 18 年度～継続
受託研究	高島市文化的景観保存調査補助業務（高島市）	平成 18 年度
	老人福祉センター機能の見直し検討資料及び報告書の作成（大津市）	平成 18 年度
	東近江市あいとうウエストランド土地利用研究会業務（東近江市）	平成 18 年度
	滋賀県経営構造対策推進にかかる事例調査及び活動記録の作成（県農業会議）	平成 18 年度
	全国都市再生モデル調査（大津・志賀地域まちづくり協働会議）	平成 18 年度
	商工会女性部ブロック別研修事業（滋賀県商工会連合会）	平成 18 年度
	地域振興調査事業（野洲商工会・中主商工会）	平成 18 年度
	平成 18 年度小規模事業者新事業全国展開支援事業（湖北町商工会）	平成 18 年度
	湖国まるごとエコ・ミュージアム推進事業（滋賀県） 20 世紀型社会の限界や矛盾を超えて 21 世紀の望ましい社会に向かうため、新しい暮らしや仕事のスタイルを創っていこうと、滋賀県が提唱し、平成 15 年度から「湖国まるごとエコ･ミュージアムづくり」（以下「まるエコ」）の取組が進められています。本センターでは、(財）滋賀総合研究所時代からの受託研究を引き継ぎ、18 年度から研究および事業を展開しました。 	平成 18 年度～ 19 年度
	長浜市地域いきいき計画 (長浜市)	平成 19 年度
	長浜市景観計画市民参加ワークショップ支援業務 (長浜市)	平成 19 年度
	都市と地方の交流居住・移住促進事業 (滋賀県)	平成 19 年度～ 21 年度
	コミュニティ活動支援機能整備検討調査 (滋賀県)	平成 19 年度～ 20 年度
	長浜市屋外広告物検討調査 (長浜市)	平成 20 年度
	むらおこし総合活性化事業（稲枝商工会）	平成 20 年度
	湖東流域森林づくり委員会活動支援業務 (滋賀県湖東地域振興局)	平成 20 年度
	まるエコ推進事業と連動したエコポイント検討調査（(株）大広）	平成 20 年度
	八幡学区まちづくり計画策定指導業務（八幡学区まちづくり協議会）	平成 21 年度
	高島ギャザリング運営支援事業（高島市）	平成 21 年度～継続
	守山地域ブランド創出調査研究事業に係る業務（守山市商工会議所）	平成 21 年度～継続
	陶芸の森利用動向等調査業務（滋賀県）	平成 22 年度

項目	事業名称	実施年度
人材育成	**近江環人地域再生学座** 近江環人地域再生学座は、湖国近江の風土、歴史、文化を継承し、自然と共生した美しい居住環境、循環型地域社会を形成するために、行政、企業、NPO などそれぞれの立場で地域再生のリーダーとなる資質を有した人材として「コミュニティ・アーキテクト（近江環人）」を育成しています。 詳しい情報は→近江環人 HP（http://ohmikanjin.net/） 	平成 18 年度～継続
	スチューデントファーム「近江楽座」・まち・むら・くらしふれあい工舎 " スチューデントファーム「近江楽座」／まち･むら･くらしふれあい工舎 " は、大学の総合力、教員の専門性、学生の行動力を源に、地域活性化への貢献をとおして、地域社会へ根付いていくプロジェクトを募集し、所定の審査を経て採択された プロジェクトに対して、調査、研究、活動等経費を助成するものです。学部、学科、研究室を超えたさまざまな学生チームが、今年度も滋賀県全域をフィールドにまちづくりや地域おこしなどの多彩な活動を展開しています。 詳しい情報は→近江楽座 HP（http://ohmirakuza.net/） 	平成 18 年度～継続
	琵琶湖塾 平成 17 年度より滋賀県彦根市出身の田原総一朗さんを塾長に迎え、7 月から翌年 2 月まで月一回開催しています。受講生各自が自らの哲学や倫理観、社会観などを豊かにする機会を提供し、社会への積極的な働きかけの契機とするとともに、その姿を 21 世紀型ライフスタイルのモデルとして全国へ、世界へ提案・発信することを目的としています。 ※滋賀県立大学地域づくり教育研究センターでは、平成 18 年度に財団法人滋賀総合研究所より事務局を引き継ぎ開催している。 	平成 18 年度～継続
	地域づくりセミナーの開催	平成 19 年度～継続
研究活動支援	**近江楽座 B プロジェクト** 自治体や企業、団体等から依頼のあった課題について、「近江楽座」のとして取り組むテーマを設定し、学生主体のプロジェクトチームを募集するもので、平成 19 年度よりスタートしました。学生チームにはテーマに対する 企画提案を求め（プロポーザル方式）、採択されたチームは、指導教員と地域づくり教育研究センターが フォローし、依頼先と共同で取り組んでいます。 写真：平成 21 年度採択プロジェクト「おうみの豊かな暮らしかた広報プロジェクト」作成の冊子（テーマ：「滋賀の魅力を再発見し、移住や交流居住を促す PR 雑誌の企画・制作」 依頼元：滋賀県）	平成 19 年度～継続

項目	事業名称	実施年度
研究活動支援	**学生地域活動サポート講座（まちづくりインターンシップ）** 学生地域活動サポート講座は、まちづくり等の活動のリーダーから思いや手法を直接学ぶことにより、地域の課題を発見する力や、その課題を解決していくために必要な企画・提案力・実践力を高め、地域における活動を担う人材育成をめざし、平成 19 年度より実施しています。 	**平成 19 年度～継続**

3-2. 受託研究

3-2-1. 湖国まるごとエコ・ミュージアム推進業務

20 世紀型社会の限界や矛盾を超えて 21 世紀の望ましい社会に向かうため、新しい暮らしや仕事のスタイルを創っていこうと、滋賀県が提唱し平成 15 年度から「湖国まるごとエコ・ミュージアムづくり」(以下「まるエコ」)の取組が進められた。本センターでは、(財) 滋賀総合研究所時代からの受託研究を引き継ぎ、18 年度から研究および事業を展開した。

1.「湖国まるごとエコ・ミュージアム」推進会議、「『たたえあう交流会』実行委員会」における検討

「まるエコ」の取組を展開するにあたり、「湖国まるごとエコ・ミュージアム」推進会議(以下「推進会議」という)を組織し、取組の企画立案を行うとともに、「たたえあう交流会」の開催内容については「推進会議」委員を含めた「『たたえあう交流会』実行委員会」において検討を行った。また、「まるエコ」の取組総括を行った。

2.「情報ボックス」プロジェクト

「まるエコ」に関する情報の受発信の窓口として、ホームページ「びわこほっと」を開設した。県内の参考事例を紹介する特派員レポートや「たたえあう交流会」へのエントリー募集の呼びかけ・結果報告の掲載、エントリー者の紹介コーナーも設けた。

写真:びわこほっとトップページ

3.「讃え合う」プロジェクト

「自然や人のつながりを大切にした暮らしや仕事のスタイル」を提案・実践している人々が一堂に会し、出会い、たたえあって元気になること、また、多様な取組が出会うことで、新たな取組が生まれるきっかけづくり、さらには様々な取組の発掘・気づきの場として「たたえあう交流会」を開催した。

写真:平成 19 年度たたえあう交流会

毎年、「選考委員会」組織し取組をたたえるとともに、各選考委員からたたえたい取組に対して、その取組の特徴をとらえたユニークな賞の名称を提案していただいた。平成17年度から3回開催した「たたえあう交流会」は、推進会議委員を中心とした「まるエコづくり」に携わる方々の熱意と工夫により多くの県民・企業・団体・NPO 等に様々な形で関わっていただいた。

写真:たたえあう交流会　各年のトロフィー

そして多様な分野や地域からの取組が集まり、出会い・

気づき、たたえあうことにより参加者自身が取組の意義や成果を確認する機会となった。また、最終年度は、高校生、大学生といった若い世代の参加者を増やすことができた。

受託研究終了後、分野の垣根を越えたユニークな集いの場である「たたえあう交流会」の考え方や手法は、滋賀県（環境学習支援センター、企画調整課、自治振興課、琵琶湖博物館）、湖国まるごとエコ・ミュージアム推進会議、本学が連携した「びわ湖・まるエコ・DAY」へと引き継がれ（平成20年度）、平成21年度には活動団体も参加した実行委員会（委員長：近藤隆二郎滋賀県立大学准教授）を組織し開催された。　（古田ゆか）

表：たたえあう交流会概要

項目	第１回	第２回	第３回
実施日	平成18年３月19日	平成19年３月10日	平成20年１月27日
会場	コラボしが21（大会議室）	ピアザ淡海（ピアザホール）	ピアザ淡海（ピアザホール）
エントリー者数	31組	46組（パネル掲示のみ含む）	40組（別にパネル掲示のみ　16組）
表彰	○まるエコ奨励大賞 「伯母Ｑ五郎～伯母川研究こどもエコクラブ～」（草津市） ○まるエコ奨励賞　４団体 ○まるエコ特別奨励賞　６団体	○まるエコ奨励大賞 「Ｐａｄｄｙ」（栗東市） ○まるエコ奨励賞　４団体 ○まるエコ特別奨励賞　８団体 ○『もったいない』で開く滋賀の未来賞２人	○おおきに大賞 「沖田条里語り部会」（高島市） ○おおきに優秀賞　４団体 ○おおきに特別賞　６団体 ○おおきに知事特別賞　３団体 ○もったいない賞 エントリー全組
来場者数	約150人	約200人	約230人
開催協力団体	―	―	滋賀県立近代美術 MIHO　MUSEUM
サブテーマ	まるエコ発見	そっとおおきに	つながると、まるエコ。一人ひとりの「もったいない」で拓く未来。
プログラム	○パネルセッション	○車座交流会	○車座交流会
	○トークセッション	○パネルセッション	○トークセッション
	○まるエコの取組紹介	○車座発表会	○選考
	○表彰	○選考	○表彰・講評
		○表彰・講評	○交流タイム（プログラム終了後）
選考委員	○今関信子さん 児童文学作家	○井阪尚司さん 滋賀県環境学習支援センター所長	○井阪尚司さん 滋賀県環境学習支援センター所長
	○小川泰江さん ＮＰＯ法人びぃめ～る企画室理事長	○今関信子さん 児童文学作家	○大平正道さん しがらき狸学会会長
	○木下達文さん 京都橘大学助教授	○大平正道さん しがらき狸学会会長	○小川泰江さん ＮＰＯ法人びぃめ～る企画室理事長
	○西澤由男さん 株式会社安土建築工房代表取締役社長	○小川泰江さん ＮＰＯ法人びぃめ～る企画室理事長	○木下達文さん 京都橘大学准教授
	○仁連孝昭さん　※選考委員長 滋賀県立大学教授	○木下達文さん 京都橘大学助教授	○西澤由男さん 株式会社安土建築工房代表取締役社長
	○国松善次滋賀県知事 ※特別選考委員	○ＮＰＯ法人ＣＡＳＮ理事長 谷口久美子さん	○仁連孝昭さん　※選考委員長 滋賀県立大学教授
		○西澤由男さん 株式会社安土建築工房代表取締役社長	○嘉田由紀子滋賀県知事 ※特別選考委員
		○仁連孝昭さん　※選考委員長 滋賀県立大学教授	
		○嘉田由紀子滋賀県知事 ※特別選考委員	
「湖国まるごとエコ・ミュージアム」推進会議／たたえあう交流会実行委員会委員	○臼坂登世美さん ＯＦＦＩＣＥ"Ｕ"代表	○臼坂登世美さん ＯＦＦＩＣＥ"Ｕ"代表	○臼坂登世美さん ＯＦＦＩＣＥ"Ｕ"代表
	○津屋結唱子さん 子どもの美術教育をサポートする会代表	○津屋結唱子さん 子どもの美術教育をサポートする会代表	○津屋結唱子さん 子どもの美術教育をサポートする会代表
	○菱川貞義さん びわこ市民研究所暫定編集長	○菱川貞義さん びわこ市民研究所暫定編集長	○菱川貞義さん びわこ市民研究所暫定編集長
	○吉見精二さん 有限会社地域観光ﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｽｾﾝﾀｰ代表	○吉見精二さん 有限会社地域観光ﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｽｾﾝﾀｰ代表	○吉見精二さん 有限会社地域観光ﾌﾟﾛﾃﾞｭｰｽｾﾝﾀｰ代表
			○井阪尚司さん 滋賀県環境学習支援センター所長
			○大平正道さん しがらき狸学会会長

3-2-2. 多様なコミュニティ・プラットフォームをつくろう
- 地域の総合力を生かす連携・協働の場や仕組みづくり -

市町村合併を契機として、これまでの旧市町村におけるまちづくり活動を引き継いだり、地域の課題を解決するため新たなまちづくりの担い手として「まちづくり協議会」の設立や取り組みが進んでいる。一方、住民自治の基礎となる自治会等の地域コミュニティにおいては人口減少や少子高齢化の進展、人と人とのつながりの希薄化等により、コミュニティ力が発揮しづらくなっている。こうした状況を受け、当センターでは、滋賀県（総務部自治振興課）から委託を受け、コミュニティの現状や活性化方策を探ることを目的に、平成19年と20年度の2ヵ年わたって「コミュニティ活動支援機能整備検討調査」に取り組み、『自助・共助、多層な連携に基づくコミュニティづくりに向けてー多様なコミュニティ・プラットフォームをつくろうー』と題した報告をとりまとめた（平成21年1月）。また、平成21年度には、近江八幡市八幡学区まちづくり協議会より依頼を受け「学区まちづくり計画」の策定をお手伝いする機会に恵まれた。本稿では、これら二つの調査研究より、最近の地域コミュニティの状況と新たなコミュニティ組織・活動の動向をみてみたい。

1. 県域でのコミュニティ活動検討会より

（1）今日のコミュニティをめぐる状況

①現状と課題について、一部地域においては自治会の加入率が低下している。地域の課題も多様化している。共通的課題では、集会施設の改修や耐震対応等ハード面。少子化や地域意識の希薄化による伝統文化継承の難しさ。地域活動の担い手不足といったソフト面。福祉や防災活動と個人情報保護といった制度面の課題等がある。

②このような課題や社会経済環境の変化に対応して、コミュニティ活動の内容も柔軟に見直していくことが必要で、特に小規模自治会等ではこれまでと同様の活動を維持していくことが困難になっている。

③まちづくり協議会等の立ち上がり期において、既存の自治会との活動の棲み分けや自立的運営、存在感の向上といった課題がある。一方、小規模自治会等にとっては役割分担により負担軽減につながる。

④NPO等の目的型住民組織と自治会等の地縁型住民組織が連携することにより活動が活性化している事例が多数ある。

⑤行財政改革に伴い自治会等と行政との関係も変わる必要があり、要望陳情型から提案、協働型のまちづくりへ転換することが求められている。

⑥行政においても対応できる組織体制の見直しや新たな仕組みづくりが必要とされている。

（2）求められる取組の方向性と活性化の支援（提案）

次の①～③の提案の他、支援機能について提案を行った。

①コミュニティの共通意識を上げるーそのために住民が気軽にふれあえる場づくりを行う。

②誰もが共有できる共通課題を重点テーマに設定し活動を支援する（防災･防犯や子育て、地域文化継承など）。

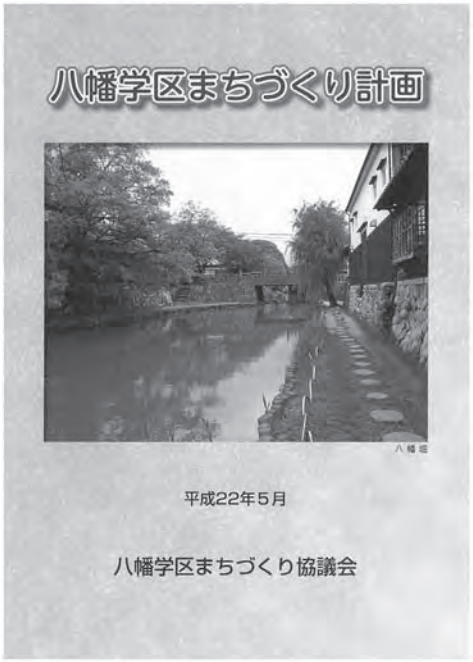
③地域の総合化、横の連携により取組方策を組み立てていく（地域の総合力を生かす）ー地域の多様な主体が参画し連携できる場やしくみを備えた「コミュニティ・プラットフォーム」をつくることを支援する。

コミュニティ・プラットフォームとは、自治会や学区、市町域など様々な地域単位で、多様な活動グループが集まり、コミュニティ活動や地域づくりに多くの人の力を生かしていける新たな連携・協働の場といった意味である。概念的で難しく感じるかもしれないが、現実には自治会レベルや学区等の広域コミュニティレベル、また防災をテーマとする防災ボランティアのネットワークなど、多様なコミュニティ・プラットフォームが県内各地で動き出している。次に紹介する近江八幡市八幡学区まちづくり協議会の取組も、まさにそのような事例である。

2. 学区等の広域コミュニティにおける取組ー八幡学区まちづくり協議会の活動

近江八幡市では、協働のまちづくり基本条例（平成20年4月1日施行）に基づき、それぞれの学区単位で、地域の特性を活かした住みよい地域をつくるため、学区まちづくり協議会が設立されることとなり、「八幡学区まちづくり協議会」も同年12月に設立された。同協議会では、翌年4月に住民アンケートを実施し、その結果をもとに学区の将来像を考え、その実現に向けてまちづく

りの活動方針等を定める「学区まちづくり計画」を策定することとなった。策定委員会を中心に8つの部会が向こう3ヵ年の活動計画を検討し、平成22年2月には、『八幡学区まちづくりフォーラム2010』を開催。地域の課題や今後の取組について区民が語り合い、計画（案）をとりまとめた。計画は、「協議会のスローガン」－「まちづくり課題」－「学区の将来ビジョン」－「重点活動計画」－「分野別活動計画」で構成されており、地域での交流促進をはじめ、地域共通の課題やこれまで取組めなかったことに取組むことが協議会の役割になることが確認された。具体的な取組テーマとしては、高齢者が身近に買物ができる場をつくったり、空き町家の活用や地域防災活動などが上がっており、協議会を構成する自治会と各種団体が連携・協力して推進する体制となっている。平成22年4月より公民館がコミュニティセンターへと変更し、センターの管理運営もまちづくり協議会が自分たちで担うこととなり、地域における役割が益々重要になっている。（秦憲志）



写真：八幡学区まちづくり計画書

3-2-3. 都市と地方の交流居住・移住促進事業

1. 事業の背景

滋賀県内における南北格差は大きく、湖北地域においても、中山間地域を中心に、過疎化や高齢化が進行し、高齢化率が 50% を上回る集落が生じる状況がある。その予備軍ともいえる集落も数多く存在しており、地域力の低下により集落の基本的な機能維持さえ困難な状況を迎えるところが今後生じてくることが懸念され、これら地域の活性化対策が急務となっている。

2. 事業のねらい

(1) 事業の目的

地方が抱える過疎化や高齢化などの課題解決の手段として、地方側が都市との交流や移住者を受け入れ地域活性化を図りたいというニーズと、団塊の世代等が退職時期を間近に控える中で、都市住民が地方圏での交流や移住をしたいというニーズに応え、交流居住や移住を促し、「地域力」を高めることを目的とする。

(2) 事業の目標

都市側のニーズと地方側のニーズをつないで、交流居住や移住を促し「地域力」を高めることを事業の目的として、本事業では、①はばひろい情報発信、②しっかりとした受け止め、③ていねいな支援、これらの役割を担うことのできる受け入れ組織の設立・運営を獲得目標とした。

3. 事業の成果

本事業の獲得目標は『はばひろい情報発信、しっかり

表：3 カ年の取り組みと事業の成果

	平成 19 年度（2007）	平成 20 年度（2008）	平成 21 年度（2009）
受入組織の設立・運営	①体制づくりの検討 ・先進事例の調査 （島根県、兵庫県丹波市）	①交流居住・移住受入組織の立ち上げ支援 （定例会の開催） ・組織に必要な機能の検討	①交流居住・移住受入組織の立ち上げ支援 （定例会の開催） ・組織のあり方検討
地元への周知活動	・交流会議の開催	・湖北人のフォーラム開催	・湖北人のフォーラム開催
はばひろい情報発信 ・情報源の収集 ・地域の魅力を再発見 ・情報のデザイン化 ・情報のデータベース化 ・戦略的なプロモーションの展開	②情報発信ツールの構築 ・移住経験者の取材 ・ホームページの構築 ・PR 冊子 ・ニュースレターの発行	②情報発信ツールの充実・強化 ・移住経験者の取材 ・ホームページの構築 ・PR 冊子 ・ニュースレターの発行	②情報発信ツールの充実・強化 ・移住経験者の取材 ・ホームページの更新 ・PR 冊子 ・ニュースレターの発行
しっかりとした受け止め ・地域の受け入れ体制整備 ・総合窓口機能の設置 ・アドバイス体制の整備 ・暮らし体験の機会提供 ていねいな支援 ・空き家などの紹介、斡旋 ・集落等での合意形成 ・生活情報の伝達 ・相談体制の整備 ・交流の機会を設定	③モニターツアー（お試し居住）の企画・実施 （伊吹山麓、浅井の里、 奥琵琶湖余呉、北国街道木之本） ・都市側ニーズの調査	③暮らし体験プログラムの企画、実施 （長浜まちなか、木之本町杉野、湖北） ・試行的空き家紹介	③田舎暮らしフェスタ in 湖北の開催 ・地元団体等のブース出展 ほか ・田舎体験ツアーの開催 ④情報共有データベースシステムの構築 ・空き地、空き家の情報データベースシステムの構築 ・空き家情報の収集
事業の成果	●受入組織に想定される機能の整理 ●都市側ニーズの把握 ●地元住民への意識付け	●交流居住・移住受け入れ組織のあり方の整理 ●交流プログラムのノウハウの蓄積 ●試行的支援活動の実践	●フェスタ実行委員会の立ち上げ ●受入組織のあり方の整理（方向性の確立） ・いざない湖北定住センターの設立へ

とした受け止め、ていねいな支援、これらの役割を担うことのできる受け入れ組織の設立・運営』にある。これを目標としてこの3ヶ年に実施してきた取り組みは、表のように要約される。また、本事業の成果として、下図のように地域を中心とした空き家活用の流れが確立できた。また、交流居住・移住促進のための受け入れ組織となる2つの組織の組織化がある。以下にそれぞれの概要と今後の展望（活動イメージ）を整理する。

①田舎暮らしフェスタ 実行委員会

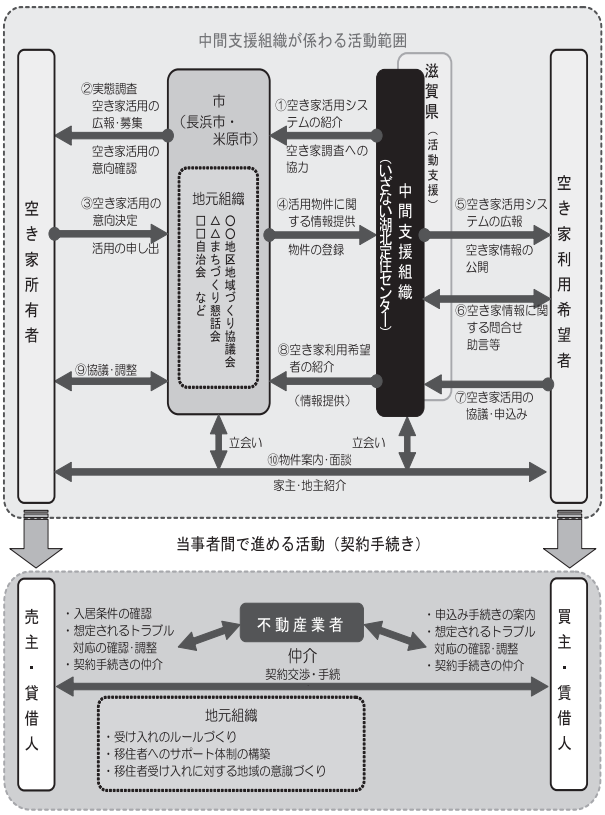
平成22年3月18日に、民間事業者や地域団体などの参加を得て、『（仮称）田舎暮らしフェスタ実行委員会設立準備会』を開催し、この会議の場において正式に実行委員会が設立された。本実行委員会の設立は本事業の大きな成果の一つである。

②いざない湖北定住センター

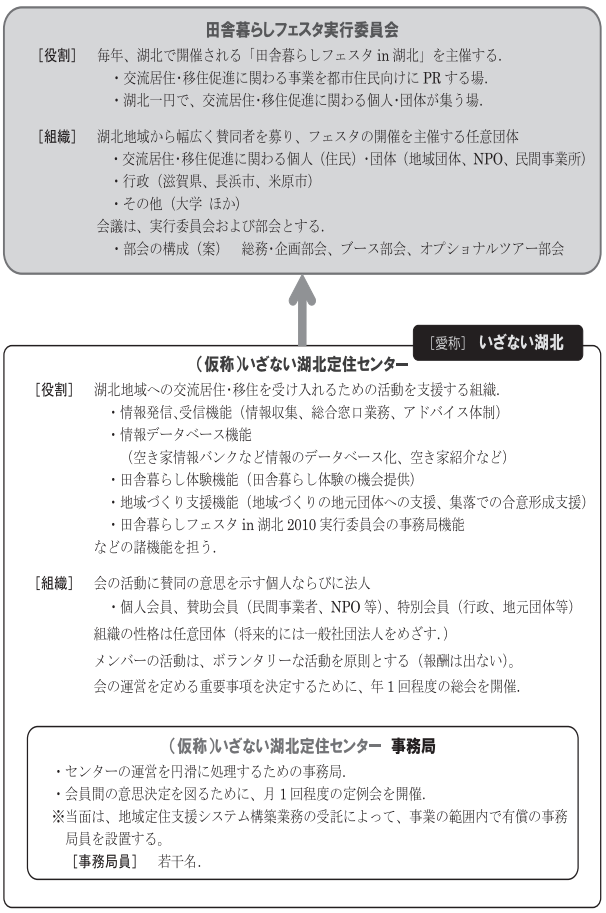
平成20年8月に組織された「湖北移住交流支援研究会」は、本事業（県事業）と協働し、湖北地域における交流居住・移住促進に向けた活動を展開してきた。湖北地域における交流居住・移住促進のための諸活動（空き家の活用や都市農村交流イベントの実施など）のノウハウや情報はこの研究会に蓄積されてきたとも言え、これも本事業のもう一つの大きな成果と言える。研究会は、この2年間の活動を通じて研究団体としての役割を終え、今後は事業を実施する活動団体としての性格を明確化する方針で、平成22年4月に『いざない湖北定住センター』と名称変更し、組織体制を改めた。

（近藤紀章）

図：空き家活用の流れ



図：湖北地域における交流居住・移住受け入れ組織



3-2-4.「地域における人材の受入体制の整備に関する調査・研究」事業

1. 移住・定住受け入れ態勢の整備を―事業の背景と課題

少子高齢化に加えて、転出超過による人口減少、そこから生じる種々の問題に強い危機感を抱く高島市は、地域の維持・再生には外部の人材を取り込むことも必要であるとの認識に立って、総合計画においては都市部の住民を対象にした「二地域居住」の推進や、同市への「若者定住促進プロジェクト」を重点施策に位置づけ、また平成20年度には「高島市若者定住促進条例」を制定し、住宅確保、就労・起業、子育て環境向上等の各分野の支援策を展開してきた。

移住・定住の推進に向けた各種の整備・支援が進み、人材受け入れの意義について市民の理解が徐々に広がっている一方、実際問題となると、移住者の積極的な受け入れには躊躇する地域も多い[1]。そこで同市が重視したのが「移住・定住者を受入れる側の地域の意識・機運を醸成すること」で、当センターはこの課題を引き受け、19、20年度は本学人間文化学部黒田末寿教授の受託研究を支援する形で、平成21年度からは当センターの受託研究として取り組んできた。

2. 誇りを持って受け入れる、敬意を払って移住する―事業に向かう姿勢

本事業の推進に当たって関係者の間で確かめあったのは「“誰でも彼でも諸手を挙げて迎え入れる”というのではなく、地域の互助システム（地域の文化ともいえる助け合いや支え合い、協力の精神など）の中で共に暮らしていこうとする人や地域の産業や伝統文化の担い手を迎え入れる仕組みを構築しよう」ということであった。これを端的に「誇りを持って受け入れる、敬意を払って移住する」という合言葉として共有した。

3. たかしまギャザリング―具体的な取り組みと成果

事業の柱として当センターの企画・運営により実施しているのが「地域における人的ネットワーク構築集会」、通称「たかしまギャザリング」である。平成20年度までに行った市内在住U·J·Iターン者へのヒアリング調査等[2]を通じて、移住・定住のきっかけとして、世話を焼いてくれる地元の人との出会いや移住経験者のサポート等、人とのつながりが極めて重要であることが明らかになった。

そこで、地域に溶け込んだ暮らしの実現に向けた意見交換・交流の場を設け、また、移住希望者が地域を知る機会をつくるため、市内外の若者を中心とする30人規模の対話集会を、年間5回程度のペースで実施することになった。集会は移住希望者だけを対象にしているわけではなく、受け入れ側の地域の人々が移住希望者との対話を通じ、彼らの視点を借りて、地域を見つめ直す機会をつくるねらいもある。移住希望者同士や彼らをサポートする内外の主体によるテーマ型コミュニティの形成と地縁型コミュニティの意識醸成の両方を目指した。

集会を重ねた結果、当初は一参加者であった人の中から、対話集会の企画・運営に積極的に関わる方も現れ、市内外のサポーターの掘り起こしと、サポーター同士のネットワーク形成への萌芽をみることができた。22年度からはこれらサポータが、企画・運営、テーマの設定に関して積極的な役割を担っている。

4. 民間ベースで、自己増殖するサポート体制を―今後の展望

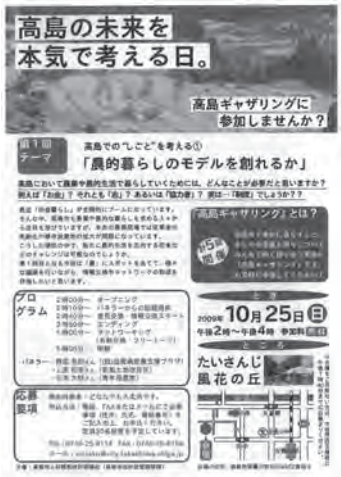
当面は、市やその関係組織を事業の実施主体の核としながらも、サポーターのネットワークや、関係する民間団体とも連携をとりながら、例えば市内各地に点在する民間の支援・相談拠点（カフェ）において、小規模な対話集会や日常的な情報交換が自己増殖していくような展開へつなげるべく、引き続き取り組んでいく。移住・定住プロジェクトの核心的な事業の実施主体そのものを委ねられるような民間の受け皿、体制の構築も視野に入れている。

（上田洋平）

1）これは、京阪神からの至近性を活かして多くの宅地造成を展開したものの、生活様式や価値観の違いから従前の集落と新しい住宅地の間で、あるいは新住民と在来住民との間で地域のルールや取り決めをめぐるトラブルに発展したというようなケースが過去にいくつかあって、それが地域には苦い経験として残っているためだとも言われている。

2) この時の調査は、本学の地域貢献プログラム「近江楽座」における地域との連携プロジェクト参加学生の活躍によって「高島ライフスタイルカタログ」冊子として結実している。

平成 21 年度たかしまギャザリング (実績)



「開発や経済発展に乗り遅れた“陸の孤島”」とも言われ、ともすれば住民自らもそのように評価するきらいがあった地域について、むしろそれも逆手にとって、「ここだからこそ創造できる暮らしや人生の豊かさはとは何か」とか、「ここで豊かな暮らしを創造するために、人々はどのような役割を担えるか」といった問いを全体の基調として、各回のテーマと話題提供者を設定して実施した。「雪かきワークショップ」等、地元と共にする作業体験を組み込んだ回もあった。

【第 1 回】しごと①・農的暮らしのモデルを創れるか
【第 2 回】すまい・未来可能なすまいのあり方
【第 3 回】ちいき・暮らしと地域との関係を考える
【第 4 回】しごと②・高島のしごとについて考える
【第 5 回】豊かな暮らしの高島モデル創造フォーラム

平成 22 年度たかしまギャザリング（計画)

前年度の「そもそも豊かな暮らしとは」という理念の共有、移住・定住に関する、より具体的な課題も取り上げている。市の態勢も徐々に整ってきたことを踏まえ、「住活ツアー」と題する地域での宿泊体験や空き家見学とも連動した集会を企画実施している。

【第 1 回】かぞく・自然の中で家族は育つ
（県立朽木いきものふれあいの里主催「婚活自然体験塾」と連携）
【第 2 回】ちいき①・いいとこどりではない暮らし
（市主催「高島体験 2010 住活ツアー」と連携）
【第 3 回】ちいき②・これが地域の底力
【第 4 回】豊かな暮らしの高島モデル創造フォーラム
【第 5 回】しごと・山のめぐみでよみがえる

「地域の教科書」づくりへの助言

ギャザリングと並行して、同市では平成 21 年度から「地域の教科書づくり」事業を開始した。「地域の教科書」は地域の歴史や組織、年中行事、種々の取り決めなど、暮らしに関わる情報を集落単位で収集、編集した冊子で、移住希望者にとっては分かりにくい部分も多い地域運営について、その透明性を担保し、地域への理解を助けることを目的に制作するものである。
集落に住むにあたり最低限わきまえておくべきことや守るべきルールを理解し納得した上で、ともに地域づくりに参加して欲しいとのメッセージを伝えるコミュニケーションの道具でもある。この作成を通じて、地元住民自身も地域のしきたりや組織について改めて見直すきっかけになる。市は「地域の教科書」づくりを進めるため「地域おこし協力隊」2 名を配置しており、当センターでは「教科書づくり」や協力隊員への助言も行っている。

写真：地域の教科書

3-3. 研究活動支援

3-3-1. 学生地域活動サポート講座

学生地域活動サポート講座の目的

学生地域活動サポート講座は、まちづくり等の活動のリーダーから思いや手法を直接学ぶことにより、地域の課題を発見する力や、その課題を解決していくために必要な企画・提案力・実践力を高め、地域における活動を担う人材育成をめざし、平成19年度より実施している。

（古田ゆか）

事業の三つの柱

- 地域活動とは何かという基礎を学ぶと共に、活動を実践している人々の具体的な話を聞くことにより、活動することの意義や活動者の志を学習する。
- 本学の学生のボランティア活動・NPO活動を活発にし、学生による地域づくりや地域との交流が円滑に図られるよう支援する。
- 講義形式と実習形式を織り交ぜた内容とし、実践を通じ座学だけでは得られない学習効果をめざす。

【平成19年度の内容】

地域活動の基礎知識から活動のリーダーによる講義など、8回の講座を実施した。滋賀県立大生の他、一般受講者も受け付けた。

回	講師	テーマ
1	**近藤隆二郎** 県大環境科学部准教授 NPO法人五環生活代表理事	地域活動の基礎知識① 「滋賀県立大学内外の地域活動 ～おもしろそうなことをみつける」
2	**阿部圭宏** NPO法人市民熱人代表	地域活動の基礎知識② 「ボランティア・NPOとは何か」
3	**上田洋平** 県大地域づくり調査研究センター研究員	地域活動の基礎知識③ 「地域の人々と共に活動する」
4	**コーディネーター、近江楽座リーダー等**	現場の声から学ぶ（実践事例①）
5	**津屋結唱子** 子どもの美術教育をサポートする会代表	実践事例② 「文化ボランティアについて」
6	**小川泰江** ＮＰＯ法人びぃめ～る企画室理事長	実践事例③ 「まちの中のコミュニティＣＡＦＥ」
7	**福井久美子** ＮＰＯ法人ＮＰＯぽぽハウス理事	実践事例④ 「福祉を支えるボランティア・ＮＰＯ」
8	**コーディネーター**	まとめ・成果発表会

【平成20年度～】

平成20年度からは、活動団体に学生の受け入れを依頼し、学生が直接現場で活動のリーダーから学ぶ形式に変更し、「まちづくりインターンシップ」として事業を展開している。

年度	内容	参加者数
平成19年度	座学、地域活動の基礎知識、 ボランティア・NPO実践事例等全８回	学生のべ51名 一般のべ15名
平成20年度	まちづくりインターンシップ 実験事業として地域活動団体２団体に派遣	学生１名
平成21年度	まちづくりインターンシップ 地域活動団体等２団体に派遣	学生19名
平成22年度	まちづくりインターンシップ 地域活動団体等８団体に学生受入依頼	参加者募集中

3-4. 人材育成

3-4-1. 琵琶湖塾

1. 琵琶湖塾とは

塾長：田原総一朗さん
（評論家・ジャーナリスト）

副塾長：坂本衛さん
（ジャーナリスト）

琵琶湖塾
滋賀県から全国へ、世界へ

琵琶湖塾ロゴ

平成17年度より滋賀県彦根市出身の田原総一朗さんを塾長に迎え、7月から翌年2月まで月一回開催している。受講生各自が自らの哲学や倫理観、社会観などを豊かにする機会を提供し、社会への積極的な働きかけの契機とするとともに、その姿を21世紀型ライフスタイルのモデルとして全国へ、世界へ提案・発信することを目的としている。

※滋賀県立大学地域づくり教育研究センターでは、平成18年度に財団法人滋賀総合研究所より事務局を引き継ぎ開催している。）

2. テーマとプログラム概要

【ディスカッションを重視】

琵琶湖塾では多様な講師の人生を年表にした「人生年表」を活用し、各講師の生き方を教材とするとともに、講師と塾生とのディスカッションの場を設け、議論を通して人間力を高めていくことを重視している。講義およびディスカッションの内容は毎回発行される「たはら版」に掲載している。また、琵琶湖塾終了後は塾長、副塾長と琵琶湖塾「生き方」探究会メンバー（ボランティアスタッフ）との討議の場として「車座懇談会」を行うなど、ディスカッションに重きを置いた取組を行っている。

表：各年度の開催趣旨

年度	開催趣旨　（パンフレットの田原塾長メッセージより抜粋）
2005	【～21世紀の視点と行動力～】 自分達は今どのような世界に生きているのか。問題の核心は何なのか。世の中にあふれる情報を鵜呑みにするのではなく、自分で考え自分で歩きだすために、自分なりの哲学を養い、心を豊かにしていただきたいと願っています。
2006	私たちの社会は、景気がよくなったといわれる一方、子どもたち、家族、高齢者はじめ弱い立場に置かれた人びとの問題など混迷を深めています。私たちは、この混迷状況から抜け出し、力強く生きる道を探さなければなりません。この地が生んだ近江商人の言葉に「三方善し」があります。客善し、世間善し、自分善し。私は、道徳や愛国心といった言葉よりも、この三方善しの精神こそが、いまの時代を生きるためにもっとも求められているのではないかと思います。※サブテーマ無し
2007	【～ワーク・ライフ・バランス～】 私たちの社会は、子どもたち、家族、高齢者はじめ弱い立場に置かれた人びとの問題など混迷を深めています。私たちは、この混迷状況から抜け出し、力強く生きる道を探さなければなりません。そのとき潜在的な成長率がマイナスに向かうとすれば、これは大変なことです。そんななか「ワーク・ライフ・バランス」という考え方への関心が高まっています。仕事と生活をどうバランスさせるか。会社と家庭をどう両立させるか。あるいは働くことと個人としての人生を生きることの調和をどう保っていくか、という問題です。
2008	【～人間力を育てるために～】 今日の混迷を招いた原因の一つは、昔ながらの血縁共同体や地縁共同体が崩壊したことでしょう。核家族化が進み親戚づきあいも減る。都市化が進み近所づきあいも減る。こうして家族は孤立し、一人ひとりの問題が、家族にも親類縁者にも地域にも解決できないまま、噴出してしまう。そんなとき大切なのは、私たち一人ひとりの生きる力だろうと、私は思います。学力や知力ではない、もっと根源的な、人間としての生きるパワーが必要だと痛感します。
2009	【～転換の時代～】 環境、介護、構造改革をしたうえでの農林水産業など、新しい産業フロンティアへの転換も、もっと真剣に検討されるべきでしょう。経済だけではありません。世襲政治家が首相になっては1年で辞めるリーダー不在の政治も、大転換期にあります。雇用、介護、子育てなどのセーフティネット機能を持っていた血縁・地縁共同体の崩壊も、私たちの社会が大転換期にあることを示しています。そんな転換期だからこそ、私たち一人ひとりの自立して生きる力が問われています。
2010	【～「変える」から「創る」へ～】 昨2009年、アメリカでは史上初の黒人大統領が誕生しました。オバマさんのキャッチフレーズは「チェンジ!」、つまり変革です。日本でも野党だった民主党が総選挙で自民党を破り、政権交代を実現しました。日米ともに歴史的な「変化」の1年でした。 しかし、もう変化に酔いしれている場合ではありません。2010年は新しい「創造」の1年にしなければ、と私は思います。

表：講師紹介（平成 22 年度）

田中均さん	（財）日本国際交流センターシニア・フェロー 元外務審議官
勝間和代さん	経済評論家 中央大学ビジネススクール客員教授
ニール・スミスさん	特定非営利活動法人グリーンスポーツ鳥取代表
藤原和博さん	大阪府知事特別顧問 前・杉並区立和田中学校校長 東京学芸大学客員教授
杉山愛さん	プロテニスプレーヤー
香山リカさん	精神科医・立教大学現代心理学部教授
白石康次郎さん	海洋冒険家

【琵琶湖塾のメインテーマは「生きる」】

琵琶湖塾では、政治経済、スポーツ、国際関係など、各界の第一線で活躍する人々を講師として滋賀に招き、自ら考え、悩み、決断し、道を切り開いてきた講師の肉声に触れ、熱いディスカッションを交わすことで、塾生が「生きる」とは何かを学び、考える場を提供している。

3. 主な講師の「生きる」とは・・・

- 井村雅代さんの場合・・・「生きてくってことは『問題を克服していくこと』だと思います」（2005 年）
- 三枝成彰さんの場合・・・「好きなことをやるべき。できないと思っても、できる限りの努力をすれば、結構できると思っている。贅沢な暮しはできなくても、やりたいことをやっていることが幸せだと感じている」（2008 年）
- 澤田隆治さんの場合･･･「笑って健康に生きる」（2008年）
- 藤原和博さんの場合・・・「生きるためには、死ぬって言うことを真剣に考えないと。肺ガンで余命一年半の方をよのなか科に招いた授業をやったりしました。死生観をもたないと輝く生はありません」（2010 年）

一般ボランティアスタッフ（大津）と県大生スタッフ（彦根）の紹介

＜一般ボランティアスタッフ＞

1 年目は琵琶湖塾実行委員会、2 年目から 4 年目までは琵琶湖塾運営委員会、5 年目からは琵琶湖塾「生き方」探究会と名称を変え、少しずつメンバーも入れ替わりながら、人生哲学を学び年々成長を続けている人たちである。講師の著作等を研究し講師の「生き方」に学ぶとともに、人生年表の作成や当日の企画、運営のお手伝いもいただている。琵琶湖塾をきっかけに大きく飛躍していただきたいものである。

＜県大生スタッフ＞

開催数の 8 回中 2 回が県立大学（彦根会場）ということもあり、県大生スタッフを募集し運営のお手伝い頂いている。当日の進行を管理するディレクターであったり、約 400 名の受講者を前に舞台で話す司会であったり、それぞれが個々の能力を発揮してがんばっていただいている。塾終了後は学生達だけで塾長、副塾長、時には講師を囲んで懇談会（湖湖だけトーク）を開催している。

自分たちが疑問に思ってることや不安に感じてること等を塾長等にぶつけ合い、今後の学生生活や卒業後の社会人としての過ごし方の参考になるようアドバイスをいただいている。（山崎弘）

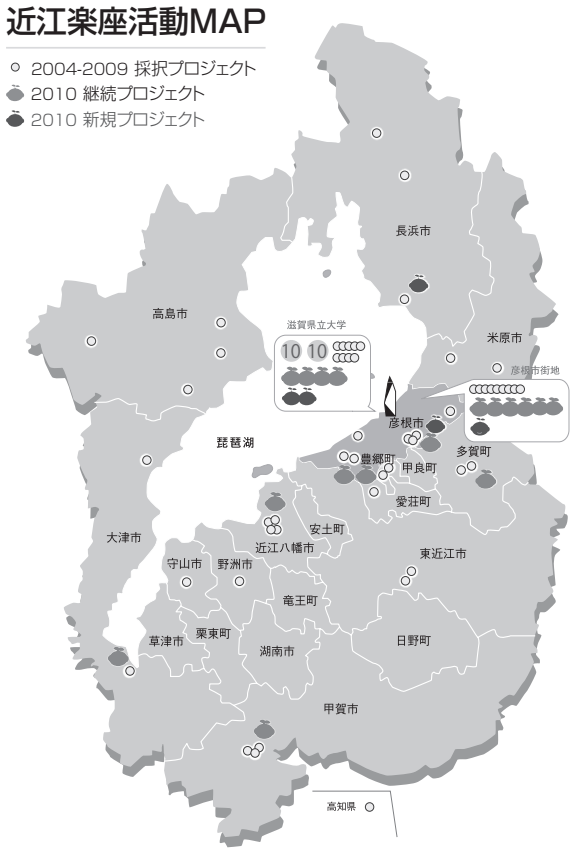
3-4-2. スチューデントファーム「近江楽座」ーまち・むら・くらしふれあい工舎

1. 近江楽座とは

“スチューデントファーム「近江楽座」ーまち・むら・くらしふれあい工舎”は、平成16年度の文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択された教育プログラムである。

本学では、開学以来、「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」を理念に、滋賀という地域との関わりを重視しており、地域をフィールドとする演習、フィールドワーク、研究活動等が活発に行われてきた。こうした実績を土台にしながら、「近江楽座」は、学生が主体となって地域活性化に貢献する活動を行うプロジェクトを学内公募し、審査・選定するとともに、採択されたプロジェクトに対して、活動費の助成、専門家のアドバイスなど様々な支援が受けられる独自の仕組みになっている。現代GPとしての取組を終えた平成19年度からは、大学独自の取組としてより一層の充実を図っているところであり、平成21年度までの6年間で、生まれたプロジェクトはのべ139、扱うテーマも、まちづくりをはじめ、環境教育や農業、ものづくり、伝統文化の継承など多岐にわたっている。

図：近江楽座活動マップ



図：近江楽座の３つのサポートと概念図

表：平成22年度　採択リスト

	チーム名	プロジェクト名
1	男鬼楽座	限界集落の村おこし
2	古民家楽座	いかして民家？
3	とよさと快蔵プロジェクト	とよさと快蔵プロジェクト
4	菜の花エネルギー	菜の花エネルギー
5	一姓（いっしょう）	一姓（いっしょう）～畑に出会いの種をまこう！～
6	Taga-Town-Project	Taga-Town-Project
7	とよさらだプロジェクト	とよさらだプロジェクト
8	エコキャンパスプロジェクト木楽部会	エコキャンパスプロジェクト木楽部会
9	あかりんちゅ	灯りんちゅ～リサイクルキャンドルでスローな夜を～
10	県大地域食育推進隊	Shiga食育推進プロジェクト
11	荒神山ロックフェス実行委員会	荒神山ロックフェス2010
12	未来看護塾	未来看護塾
13	七曲りでいっちょやったるか！！	七曲り仏壇職人にまつわる絵本作成プロジェクト
14	廃棄物バスターズ	Let’s複合
15	ボランティアサークルHarmony	障がい児・者、自立支援・共生社会プロジェクト
16	DIG’S	ART FORUM 2010 DIG’S
17	長浜BASARA	湖北　戦国プロジェクト
18	おとくらプロジェクト	おとくらプロジェクト
19	生活デザイン学科14期生	Living design 14th FASHION SHOW
20	信・楽・人 -field gallery project-	信・楽・人 -field gallery project-
21	チーム・バンデイラ・ジ・オウロ	バンデイラ・ジ・オウロ
22	いしアート	石山アートプロジェクト

2. 近江楽座の運営について

本センターではこれまで、「近江楽座」に採択されたプロジェクトの活動マネージメントに加えて、スキルアップ事業、交流事業、広報事業などの企画・運営も行なっており、幅広い人材の育成や、大学と地域の方々がつながりあう場づくりも図ってきた。そのような幅広い事業を推進していくために、社会貢献推進委員会の一専門委員会である教員組織「近江楽座専門委員会」と、近江楽座プロジェクトの代表経験者有志による学生組織「近江楽座学生委員会」が設置され、スタッフ、学生、教員がそれぞれの視点からアイデアを出し合いながらサポートしている。

写真：未来看護塾のクリスマス会の様子

写真：生活デザイン 14 期生の Vivacity ファッションショーの様子

3. 近江楽座の意義、そして今後に向けて

平成 21 年度活動報告書巻末に掲載しているコラム「近江楽座のこれまでにみる地域と大学、そしてこれからへの視座」では、「近江楽座」での取組の最初の 3 年を“土壌づくり”、次の 3 年を“活性化”ととらえて、7 年目を迎える平成 22 年度を新しい 3 年のはじまりと位置づけている。そこで、これまでの実績の“発信”を目指し、年度当初より学生たちのいきいきとした活動の様子をリアルタイムで伝えるホームページの整備を進めた。その結果、「滋賀 web 大賞 2010」（主催 : 滋賀県地域情報化推進会議）の教育・公共団体部門で最優秀賞を受賞することができた。

写真：近江楽座 HP　トップページ

実際に地域へ出て活動する「近江楽座」の経験を通じて、学生たちは社会の仕組みに対する正しい理解や、地域に根ざした問題発見の能力、合意形成をはじめとするコミュニケーション能力など、実践的なスキルを習得できるほか、自ら考え行動することの大切さや、やりがいを体感することができる。

そのような学びと気づきを起点として、プロジェクトに関わるすべての人と、大学がつながり、地域の新たな価値創造に寄与するものとなることを今後も目指していきたい。　（上川七菜）

3-4-3. 近江環人地域再生学座

1. 近江環人地域再生学座とは

「近江環人地域再生学座」（以下、学座）は、平成18年度の文部科学省新規プロジェクトである「地域再生人材創出拠点の形成」に採択され、実施する教育プログラムである。滋賀県立大学が有する知的資源を活かし、科学技術を活用して、地域再生、地域活性化など地域が必要とする優秀な人材を輩出することを目的としている。本センターに事務局をおき、学座の運営を行っている。

学座には、大学院博士前期課程修了（修士）資格と合わせて「コミュニティ・アーキテクト（近江環人）」（以下、CA）の称号を付与するAコースと、行政・企業・NPO等に所属する一般の方を対象とし、学位に関わらずCAの称号を付与するBコースの2コースを設けている。CAとは、行政・企業・NPOなどそれぞれの立場を生かしながら、地域再生のための事業や活動を企画、実践するリーダー、またはコーディネーターとして、その役割を担うための知識と技術を習得した人材のことである。1年間の講義・実習プログラムを経て、単位を取得し、所定の検定試験に合格することによって、本学からCAの称号が付与される。これまでの4年間で、Aコース22名、Bコース26名の、計48名がCAの称号を取得している（平成22年12月現在）。

写真：実習でのグループ作業の様子

表：1年の運営スケジュール（平成21年度実績）

時　期	事　項
4月10日(金)	平成21年度春開講式（9名入学）
前期講義・実習開始	毎週金曜（4限・5限） ・地域診断法特論（15コマ） ・コミュニティ・マネージメント特論（15コマ） 毎週土曜（3～5限） ・コミュニティ・プロジェクト実習Ⅱ
7月25日（土）	前期講義終了
	・第5回検定試験模擬試験の実施
9月13日（日）	第5回検定試験
9月14日（月）	平成21年度秋入学試験
9月18日（金）	平成21年度秋入学試験合格発表
9月25日（金）	第5回検定試験合格発表
10月2日（金）	平成21年度秋開講式（9名入学）
後期講義・実習開始	毎週金曜（4限・5限） ・地域再生学特論（15コマ） ・エコ・テクノロジー特論（15コマ） 毎週土曜（3～5限） ・コミュニティ・プロジェクト実習Ⅰ
2月5日（土）	後期講義終了
	検定試験模擬試験の実施
2月28日(日)	第6回検定試験
3月8日（月）	平成22年度入学試験
3月12日(金)	第6回検定試験合格発表
3月15日（月）	平成22年度入学試験合格発表
3月20日(土)	平成21年度称号授与式（修了式）

2. 近江環人地域再生学座の運営について

学座では、地域再生から地域診断まで（コミュニティや市街地の再生や活性化、地域の文化の継承や環境の改善等）、地域固有の課題を読みとり、地域再生を総合的にオーガナイズしていくために必要な知識や方法論を、1年間で4科目の座学と2つの実習プログラムで指導してきた。学座専任教員だけでなく、教育、研究、実務の実績豊富な学内外の教員たちが担当していることも、学座の魅力の一つとなっている。また、学内および一般の方々を対象に、年に数回の公開特別講義を行い、学座についての理解を広めると共に、賛同者（自治体、企業、NPO等）の輪を広げるために、地域再生に関する研修や情報交換の場として、月に1回程度の研究会を開催してきた。

写真：特別公開講義の様子

3. 修了生の取り組み

また学座修了後は、CAの称号を取得した人材を中心に「環人会」を組織し、研修や交流会等を行ってきた。平成21年には、びわ湖環境ビジネスメッセ2009や、びわ湖・まるエコDAY2009に参加するなど、近江の地域再生、地域活性化にかかる活動に携わってきた。

そして、平成22年7月には、新たにNPO法人「コミュニティ・アーキテクト（近江環人）ネットワーク」（以下、環人ネット）を設立することとなった。この環人ネットは、地域社会の抱えるさまざまな課題に対して、専門的、総合的な知識と経験および学座で獲得したスキルおよび人的ネットワークを活かし、組織的・継続的に取り組んでいくために、CAの称号取得者とともに、地域再生に対する志を共有する人材で構成されている。また、法人格を取得することによって、行政、大学、企業、各種団体などとの連携、協働を実現するとともに、地域課題の解決に必要な調査研究、情報発信、地域支援等の事業を推進し、活力ある地域社会の構築に貢献することを目指している。

写真：ビジネスメッセ平成21出展の様子

4. 今後の展望

学座は平成22年度末で5年間の取り組み期間が終了する。取り組み期間の終了する平成23年度にむけて、これまでの学座の取り組みをベースに、研究科を横断する学際的な教育・研究プログラムとして「学座（副専攻）システム」を大学院に創設し、引き続き地域再生のための人材育成を目的とした学座の教育プログラムを継続、発展させることとした。（桂田佳寿美）

4. 研究員、職員メッセージ

■秦憲志

地域と出会い－『ふるさと我が川辺 (かわづら) なつかしの風景』は、栗東市川辺在住の中野重光さんが、77歳の喜寿を記念して、自らまとめた心温まる大著である。人生には人の縁の不思議さを感じずにはおれない出会いがある。中野さんたち稲荷を守る会との出会いもまさにそんな縁に導かれたものだった。5年程前、地域づくりの相談を受けたのが縁で、守る会メンバーとの活動が始まった。社務所で昔の村絵図を広げると、子どもの頃の遊びや地域の様子、生活のことについて、たくさんの思い出が溢れ出て来た。中でも、子ども時代の出来事を生き生きと語る中野重光さんの話にみんな引き込まれた。そんな地域の物語を今の人たちにもわかりやすく伝えたいと、知人の大村紀子さんにお願いして、聞き書きで「少し前の川辺お話」の風景を描いてもらった。成果を地域学習のプログラムに生かすため、ワークショップも行った。その後、中野さんは地元小学校の池にメダカを放流し、地域の自然や歴史の話をして、子どもたちから「メダカのおっちゃん」と親しまれるようになった。2年がかりでとりまとめたこの本には、「子どもたちや若い人たちに生まれ育ったふるさとを大切にしてほしい」という思いが一杯つまっている。中野さんご自身、本が出来上がる直前に、突然倒れ、帰らぬ人となられた。本当に信じられないことであるが。今は、温かいたくさんのメッセージをいただいたことに感謝し、多くの人にその思いが伝わっていくこと願っている。

■古田ゆか

琵琶湖塾事務局、学生地域活動サポート講座事務局、近江環人地域再生学座の予算管理、そして受託研究を担当しています。前職の滋賀総合研究所時代から、まちづくり等の活動団体のみなさん、男女共同参画をテーマに活動しているみなさんなど、現場で実践している人々と接してきました。みなさん熱い！そして語る‼お会いするたびに、感心し、エネルギーのおすそ分けをいただいています。

活動の現場には、実践者たちの「課題を見つける力」や「アイデアを実践に結びつける力」「思いを伝える力」「相手の思いを理解する力」など、様々な力が渦巻いているように感じます。学生のみなさんにも、ぜひ、活動の現場に渦巻く力に触れ、長い人生を生き抜いていくヒントを得ていただければと考えています。また、活動団体の中には、せっかく成果を積み重ねてきても記録が十分整理されていなかったり、新しい展開に向けて人材を求めているところもあります。学生のみなさんをはじめとした、フレッシュな人材やスキルを持った人と活動を結び付け、Winwin の仲立ちができればと考えています。

■山崎弘

琵琶湖塾には初年度より事務局員として関わらせていただいております。当初は事務局およびボランティアスタッフのほとんどがこのような事業に未経験でどこから手をつければよいのかわからないぐらいでした。毎週のようにミーティングを開き、色々なことを何回と繰り返し、何とかひとつの形をつくりあげることができました。それにしても多くの人が集まるといろんなアイデアが出るもんだなぁとつくづく感心してばかりでした。

以前、合宿と称して1泊2日でミーティングを行いました。その時、「琵琶湖塾で得られるもの?」との問いに「出会い」と答えた方が多くおられ、私もその中の一人でした。

塾長、副塾長、ゲスト講師との出会い。ボランティアスタッフとの出会い、塾生との出会い。多くの方と出会うといろんな考え、意見を聞くことができ、とてもおもしろくたくさん吸収できます。地球上には約60億人が暮らしています。1秒間に一人と出会っても生涯全員と出会うことはできません。限られた出会いをこれからも大事にしていければと思います。

今後も琵琶湖塾を通じて多くの方と出会い、皆様といっしょに「生きる」を考えていければと思っております。

■上田洋平

特定研究員を拝命。専門は地域文化学。「在所」と呼ばれてきた単位地域について、それは人間にとって「からだ（物質／自然性）・こころ（関係／社会性）・たましい（時間／歴史性）」の存立の根拠地である、と自分なりの見立てをして、その来し方行く末を考えています。古き「在所」から飛び出したが、からだはグローバル化し、こころはのっぺらぼうで百面相、たましいは「千の風」であって、私たちはいま「所在無く」立ちすくんでいる。こんな時代における「新しい在所」をいかに構想

し実現するか。「地域」へはそんなふうにアプローチしています。また「文化とはめぐみをめぐりあわせるまなざしといとなみである」との直観から入って、そのまなざしをいかに磨くかをテーマにいくつかの実践をしています。めぐみをまさにめぐみであると認め、事物の上に新たな価値を付与する私たちのまなざしを想像力と言い換えてもよく、これは人間最大のめぐみであると思います。想像力は「知識と身識」を両翼としてはばたきます。様々な知と身の出会いを画策し、それ自体めぐみである地域の色々な人の「居合わせ」から「仕合せ」が生まれる場をつくることが自分の使命だと思っています。

■近藤紀章

専門は環境社会システムです。具体的には、人間と環境、私の場合は、特に地域や社会とのつながりを、文化や民俗を手がかりとして、モデルとして掘り起こし、地域づくりにおける参画のシステムとして、再びデザインしていくことを目指しています。

これまで、都市観光や集客施設に関する調査、研究を行ってきましたが、近年は、主に湖北地域で、都市農村交流、空き家の活用、農山村の地域振興に関わってきました。

現在の関心事は、環境学の先にある地域学や地域研究において、「地域哲学」のあり方を計画論と文化論の境界から構築することです。特に、人々が移動によって自らの暮らしのなかに新たな定点を獲得していく過程において、個人の地域像や世界観がどのように広がりを帯びながら、描かれていくのか。従来の定住を前提とした地域像ではなく、多様な主体によって描き出される地域像を、故郷と異郷、そして流刑地をキーワードとして再構築を目指しています。同時に、計画論的な視点として「日本をどうするか」を考えるとともに、この先にある「いくつもの日本」を文化論的に描き出す作業にとりかかりたいと考えています。

■桂田佳寿美

地域づくり教育研究センターに勤めて、もうすぐ3年がたちます。最初にここへ来たときは、「まちづくり」という言葉の意味さえよく知りませんでした。ですから「近江環人地域再生学座」とは何なのか、どんなことを勉強して、何を目指すものなのか、学座についての説明を受けたりパンフレットを読んだりしても、あやふやでした。学座の講義には、毎回様々な先生が来てくださり、知識や経験、実践に基づいた貴重な話を伺うことができますが、私たち事務職員は学座生の方たちと一緒になって講義を受けるわけではありません。しかし、講義レポートや実習やグループ活動の発表などを聞いていると、みなさんがどのような志を持って学座に入ったか、地元や地域をどうしていきたいかなどの思いが伝わってきて、身近な場所のことを、こんなふうに考えている人たちがいるのだということに感心させられます。そして、私にも何か地域に貢献できることはあるか、考えるきっかけにもなりました。来年度からは新しいシステムでの学座が始まります。滋賀県の明るい未来のために、活躍してくれる人材を育てる近江環人地域再生学座が、これからも長く続いていってほしいなと思います。

■上川七菜

現在は“スチューデントファーム「近江楽座」- まち・むら・くらしふれあい工舎”の事務局スタッフとして、運営サポートや、学生プロジェクトへのアドバイスなどの推進支援業務を行っています。加えて、センター主催のセミナーや講演会などの広報物のデザインも担当させていただいています。

私は、滋賀県立大学の5期入学で、大学院修了後、一般企業に就職した後、現職に就いてます。そのような立場でみてみると、「近江楽座」は、大学の中の“ちいさな社会”ではないかと感じています。ともに活動する人々とのコミュニケーションや、予算執行や計画実行のための段取り等、「近江楽座」で必要とされる工程は、学生たちに取っては、なじみがなく煩わしく感じるものも少なくありません。しかし、ルールに基づいた事柄の進め方を積み重ねるなかで、少しずつ自分たちなりの責任の果たし方を考え、社会に近づいていくように感じるからです。

「近江楽座」の活動のような、+ α に価値をおいて行動を起こせる人が、今後ますます求められていくように思います。今の職務を通じて、そうした人材を育てる一助となり、私自体も学生とともに成長してきたいと願っています。

5. 資料

5-1. 琵琶湖塾開催実績

■平成 22 年度（第 6 回）実績「生きる～『変える』から『創る』へ」			
回　数	開催日	講　師	会　場
第1回	開講式 7月7日（水）	田中均さん（(財）日本国際交流センターシニア・フェロー、元外務審議官） ※ディスカッション田原塾長・坂本副塾長	(大津)
第2回	8月 11 日（水）	勝間和代さん（経済評論家、中央大学ビジネススクール客員教授） ※ディスカッション：田原塾長	(大津)
第3回	9月8日（水）	ニール・スミスさん（特定非営利活動法人グリーンスポーツ鳥取代表） ※ディスカッション：坂本副塾長	(大津)
第4回公開琵琶湖塾	9月 29 日（水）	藤原和博さん（大阪府知事特別顧問／前・杉並区立和田中学校校長／東京学芸大学客員教授） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(彦根)
第5回公開琵琶湖塾	11 月 17 日（水）	杉山愛さん（プロテニスプレーヤー） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(彦根)
第6回	12 月 22 日（水）	香リカさん（精神科医・立教大学現代心理学部教授） ※ディスカッション：坂本副塾長	(大津)
第7回	平成 23 年 1月 26 日（水）	田原総一朗さん（評論家・ジャーナリスト） ※ディスカッション：田原塾長	(大津)
第8回	閉講式 2月9日（水）	白石康次郎（海洋冒険家） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(大津)
■平成 21 年度（第 5 回）実績　「生きる～転換の時代」			
回　数	開催日	講　師	会　場
第1回	開講式 7月8日（水）	佐藤優さん（作家） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(大津)
第2回	8月 19 日（水）	中田宏さん（横浜市長） ※ディスカッション：田原塾長	(大津)
第3回	9月 16 日（水）	鎌田実さん（医師・作家） ※ディスカッション：坂本副塾長	(大津)
第4回公開琵琶湖塾	10 月 21 日（水）	井村雅代一さん（井村シンクロクラブ代表） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(彦根)
第5回公開琵琶湖塾	11 月 25 日（水）	陰山英男さん（立命館大学教育開発推進機構教授） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(彦根)
第6回	12 月 9 日（水）	岸井成格さん（毎日新聞特別編集委員） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(大津)
第7回	平成 22 年 1月 20 日（水）	財部誠一さん（経済ジャーナリスト） ※ディスカッション：田原塾長	(大津)
第8回	閉講式・塾生討議 2月3日（水）	村田晃嗣さん（同志社大学法学部政治学科教授） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(大津)
■平成 20 年度（第 4 回）実績　「生きる～人間力を育てるために」			
回　数	開催日	講　師	会　場
第1回	開講式 7月 16 日（水）	辻井喬さん（小説家） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(大津)
第2回	8月6日（水）	田原総一朗さん（琵琶湖塾塾長） ※ディスカッション：田原塾長	(大津)
第3回	9月 17 日（水）	澤田隆治さん（元ディレクター・プロデューサー） ※ディスカッション：坂本副塾長	(大津)
第4回公開琵琶湖塾	10 月 29 日（水）	手嶋龍一さん（外交ジャーナリスト・作家） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(彦根)
第5回公開琵琶湖塾	11 月 26 日（水）	三枝成彰さん（音楽家） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(彦根)
第6回	12 月 10 日（水）	前原誠司さん（衆議院議員） ※ディスカッション：田原塾長	(大津)
第7回	平成 21 年 1月 14 日（水）	臼井律郎さん（医師） ※ディスカッション：坂本副塾長	(大津)
第8回	閉講式・塾生討議 2月 18 日（水）	掘澤祖門さん（叡山学院院長） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(大津)
■平成 19 年度 (第 3 回)　「生きる～ワーク・ライフ・バランス」			
回　数	開催日	講　師	会　場
第1回	開講式 7月4日（水）	田原総一朗さん（琵琶湖塾塾長） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(大津)
第2回	8月 29 日（水）	寺脇研さん（京都造形芸術大学教授、ＮＰＯ教育支援協会チーフ・コーディネーター） ※ディスカッション：田原塾長	(大津)
第3回	9月 19 日（水）	有森裕子さん（バルセロナオリンピック、アトランタオリンピック大会の女子マラソンメダリスト） ※ディスカッション：坂本副塾長	(大津)
第4回	10 月 3 日（水）	竹中平蔵さん（慶応義塾大学教授、ｸﾞﾙｰﾊﾞﾙｾｷﾘﾃｨ研究所所長） ※ディスカッション：田原塾長	(大津)
公開琵琶湖塾	11 月 14 日（水）	姜尚中さん（東京大学情報学環教授） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(彦根)

第5回	12月19日（水）	下村満子さん（ジャーナリスト） ※ディスカッション：田原塾長	(大津)
第6回	平成20年 1月16日（水）	石丸次郎さん（アジアプレス所属のジャーナリスト） ※ディスカッション：坂本副塾長	(大津)
第7回	2月13日(水)	日高敏隆さん（京都大学名誉教授、前総合地球環境学研究所所長、滋賀県立大学名誉学長） ※ディスカッション：田原塾長	(大津)
第8回	閉講式・塾生討議 3月12日（水）	掘澤祖門さん（叡山学院院長） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(大津)
■平成18年度(第2回)　「生きる」滋賀県から全国へ世界へ			
回　数	開催第1候補日	講　師	会　場
第1回	開講式 7月5日（水）	田原総一朗さん（琵琶湖塾塾長） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(大津)
第2回	8月9日（水）	宇津木妙子さん（日立&ルネサス高崎女子ソフトボール部総監督） ※ディスカッション：坂本副塾長	(大津)
第3回	9月13日（水）	佐々木かをり さん（株式会社イー・ウーマン代表取締役社長） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(大津)
第4回	10月4日（水）	高野孟さん（インサイダー編集長） ※ディスカッション：田原塾長	(大津)
公開琵琶湖塾	11月8日（水）	蜷川幸雄さん（演出家） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(彦根)
第5回	12月1日（金）	辻元清美さん（衆議院議員） ※ディスカッション：田原塾長	(大津)
第6回	12月15日（金）	塩川正十郎さん（元財務大臣、東洋大学総長） ※ディスカッション：田原塾長	(大津)
第7回	平成19年 1月17日(水)	養老孟司さん（東京大学名誉教授） ※ディスカッション：坂本副塾長	(大津)
第8回	2月7日(水)	大家友和さん（米大リーグ　ブルージェイズ投手） ※ディスカッション：坂本副塾長	(大津)
第9回	閉講式 3月7日（水）	堀澤祖門さん（叡山学院院長） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(大津)
■平成17年度(第1回)　「生きる」21世紀の視点と行動力			
前期：「地域新時代を生きる」			
回　数	開催日	講　師	会場
第1回	開講式 7月6日（水）	田原総一朗さん（琵琶湖塾塾長） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(大津)
第2回	8月3日（水）	田中康夫さん（作家・長野県知事） ※ディスカッション：坂本副塾長	(大津)
第3回	9月27日（火）	田原総一朗さん（琵琶湖塾塾長） ※ディスカッション：田原塾長	(彦根)
第4回	10月5日（水）	月尾嘉男さん（東京大学名誉教授・地域自立戦略会議アドバイザー） ※ディスカッション：坂本副塾長	(大津)
第5回	11月2日（水）	田原総一朗さん（琵琶湖塾塾長）	(大津)
後期：「世界を舞台に生きる」			
第6回	12月14日	岡本行夫さん（元内閣総理大臣補佐官・外交評論家） ※ディスカッション：田原塾長	(彦根)
第7回	平成18年 1月25日（水）	井村雅代さん（シンクロナイズドスイミング前日本代表ヘッドコーチ） ※ディスカッション：坂本副塾長	(大津)
第8回	2月8日（水）	堀紘一さん（株式会社ドリームインキュベータ 代表取締役社長） ※ディスカッション：田原塾長	(大津)
第9回	閉講式 3月1日（水）	田原総一朗さん（琵琶湖塾塾長・ジャーナリスト） ※ディスカッション：田原塾長、坂本副塾長	(大津)

※講師の方の所属は当時のものを記載しております

5-2. 春・秋・移動公開講座開催実績

実施年	実施日	講 師	職 名	テ ー マ	出席人数
平成 8 年	6/1	西川幸治	人間文化学部長	ガンダーラ ―東西文化の交流―	216
	6/8	栗山茂	国際教育ｾﾝﾀｰ教授	イギリス文学と聖書	186
	6/15	三好良夫	工学部教授	冬に咲く朝顔―形状記憶合金とその応用	185
	6/22	鄭大聲	人間文化学部教授	人間と食文化―なぜ食べ物が文化なのか―	172
	6/29	末石冨太郎	環境科学部教授	観光学入門	176
				合　計	935
H8　移動	11/30	菅谷文則	人間文化学部教授	シルクロードと中国の国境　（会場：水口町）	250
平成 9 年	5/17	髙谷好一	人間文化学部教授	滋賀を「聖地」にしよう	153
	5/24	安野正之	環境科学部教授	蚊―マラリア―人	126
	5/31	嶋本譲	工学部教授	動力と人のかかわり	118
	6/14	大谷泰照	国際教育ｾﾝﾀｰ教授	日本人と異文化理解	120
	6/28	弓削マリ子	看護短期大学部長	子どもから学ぶ人間学	126
				合　計	643
H9　移動	11/29	伏見碩二	環境科学部助教授	雪でみる湖国の環境変化　（会場：今津町）	200
	11/29	林博通	人間文化学部助教授	日本のなかの高島文化―古代遺跡が語る高島地方―（今津町）	200

実施年	実施日	講 師	職 名	テ ー マ	出席人数
平成 10 年	5/23	深見茂	国際教育ｾﾝﾀｰ教授	ドイツ短編小説と鴎外の「雁」	291
	5/30	久馬一剛	環境科学部教授	アジアの農業と環境を考える	251
	6/6	浅田庚子	看護短期大学部教授	健康生活と音楽の効果	233
	6/20	黒田末壽	人間文化学部教授	スタンド・バイ・ミー　1950 年代の子どもの共同体	222
	7/4	菊池潮美	工学部教授	物を見る―顕微鏡の世界―	214
				合　計	1211
H10　移動	11/28	寄本明	国際教育ｾﾝﾀｰ助教授	生活習慣病予防としてのウオーキング（会場：木之本町）	150
	2/20	藤原悌三	環境科学部教授	我が家の耐震・安全性ー阪神・淡路大震災に学ぶ（野洲町）	120
平成 11 年	5/22	奥村清彦	国際教育ｾﾝﾀｰ助教授	英語偏重社会の落とし穴	185
	5/29	荻野和彦	環境科学部教授	熱帯雨林の生態系修復の試み	152
	6/5	山田明	看護短期大学部教授	日本のワクチンの現状	139
	6/19	小林清一	人間文化学部教授	社会保障と社会福祉の「日・米」比較―ｽｳｪｰﾃﾞﾝ・ﾓﾃﾞﾙを手がかりにして―	127
	6/26	曾我直弘	工学部教授	ガラスの発展と文明	137
				合　計	740
H11　移動	7/17	栗田修	人間文化学部教授	人間のやる気と生涯学習（会場：大津市）	150
	12/4	柴田克己	人間文化学部教授	栄養による健康・不健康ー健康食品とは？（会場：八日市市）	102
平成 12 年	5/27	奥野長晴	環境科学部教授	環境・食物・水	175
	6/3	石田法雄	国際教育ｾﾝﾀｰ助教授	共生を考える―点から線への認識を通して―	156
	6/10	藤田きみゑ	看護短期大学部長	生活習慣病を食生活から考える	160
	6/17	土井崇司	人間文化学部教授	日本人の住まう空間と空間イメージ	156
	6/24	内藤悦郎	工学部教授	伝熱学とは―熱と生活の知恵を科学する―	151
				合　計	798
H12　移動	7/22	早川史子	人間文化学部教授	生活習慣病予防と茶のかかわり	80
	11/23	小貫雅男	人間文化学部教授	大地に明日を描くー映像作品　四季・遊牧から考える（今津町）	80
平成 13 年	6/2	上原盛人	国際教育ｾﾝﾀｰ教授	英詩の世界	185
	6/9	水原渉	環境科学部教授	環境共生の地域像	155
	6/16	川村正純	看護短期大学部教授	食生活と発癌	153
	6/23	田中皓	工学部教授	暮らしを彩る高分子	151
	6/30	高橋美久ニ	人間文化学部教授	湖北・山岳寺院を探る	171
				合　計	815
H13　移動	10/27	近藤隆二郎	環境科学部助教授	環境文化の掘り起こしと再生ーインダス･インカ･インド･巡礼から読みとったもの（びわ町）	45
平成 14 年	5/25	田中勝之	工学部教授	空気粒子に乗る―ﾊｰﾄﾞﾃﾞｨｽｸのﾅﾉﾒｰﾀｰ技術―	138
	6/1	長谷川博	環境科学部教授	21 世紀の食料・環境と遺伝資源	131
	6/8	森下妙子	看護短期大学部教授	家庭における看護の実際	116
	6/15	岡本進	国際教育ｾﾝﾀｰ助教授	生涯ｽﾎﾟｰﾂとしてのﾆｭｰｽﾎﾟｰﾂ―豊かなｽﾎﾟｰﾂﾗｲﾌをめざして―	106
	6/22	竹下秀子	人間文化学部助教授	母と子がヒトの進化を切り拓く―「子育ち」の発達心理学―	115
				合　計	606
H14　移動	12/8	林昭男ほか３名	環境科学部教授	ホタルと共生するまちづくりー環境負荷の少ない地域づくり（守山市）	77
平成 15 年	5/17	仁連孝昭	環境科学部教授	エコ村とは？	238
	5/24	岡谷卓司	工学部教授	売られている餅が黴ないのはなぜ？―食品包装での大発明を知っていますか―	221
	5/31	京樂真帆子	人間文化学部助教授	古代近江の女たち	208
	6/7	高橋里亥	人間看護学部教授	母性と家族・子育て支援	178
	6/14	亀田彰喜	国際教育ｾﾝﾀｰ助教授	情報ネットワークと生活情報	164
				合　計	1009
H15　移動	12/13	山根浩二	工学部教授	子どもたちの未来を支える新しいエネルギー	48
平成 16 年	5/15	石田英實	人間看護学部教授	化石から見たサルからヒトへの進化	211
春期	5/22	寺島廸子	国際教育センター教授	英語の不思議ー発音とつづり字ー	203
	5/29	國松孝男	環境科学部教授	琵琶湖北湖の水質改善と今後の水環境保全における住民の役割	203
	6/5	灘本知憲	人間文化学部教授	老化と寿命	222
	6/12	松下泰雄	工学部教授	生活の中にひそむ数学	175
				合　計	1014
平成 16 年	10/23	野間直彦	環境科学部講師	動き始めたエコキャンパスプロジェクト	93
秋期	10/30	吉田徹	(財)滋賀県産業支援プラザ主任研究員	私たちが取り組んだ環境マネジメントシステム	74
	11/6	増田佳昭	環境科学部助教授	環境にやさしい水田農業をめざして～官民学の提携～	72
				合　計	1181
H16　移動	1/29	松本行弘	人間看護学部教授	「宮崎駿」の世界：千と千尋の神隠しの心理的分析（大津市）	129
実施年	実施日	講 師	職 名	テ ー マ	出席人数
平成 17 年	5/21	外狩章夫	国際教育センター	イギリス文学の不思議ーコンラッドの生きた３つの世界ー	183
春期	5/28	竹村節子	人間看護学部	医療における利用者（患者）の権利	198
	6/4	武邑尚彦	人間文化学部	共生の地域学ーアジアの地域と湖国の地域	151
	6/11	松岡純	工学部教授	身近な材料科学ー携帯電話の中の新材料	135
	6/18	倉茂好匡	環境科学部	土砂とゴミからみた河川環境	139
				合　計	806
テーマ：滋賀県立大学における実践的なまちづくりへの取り組み					
平成 17 年	10/15	近藤隆二郎	環境科学部助教授	『顔出し看板』づくりのススメー地域のものがたりを活かしたまちづくりー	66
秋期	11/5	上田洋平	環琵琶湖生活圏〈人と地域〉研究所	地域マンダラを描く！ー〈心象図法」と五感の地域学	68
	11/19	石川慎治	人間文化学部助手	町並み保全による地域づくり・人づくり	52
				合　計	940
H17　移動	1/28	印南比呂志	人間文化学部助教授	イタリアものづくりとスローフード　（会場：甲賀市）	60

実施年	実施日	講 師	職 名	テ ー マ	出席人数
平成 18 年	5/20	高橋卓也	環境科学部講師	三都水源林ものがたり：ニューヨーク、バンクーバー、東京の水源林から考える	243
春期	5/27	呉凌非	国際教育センター助教授	ことばをコンピュータがどう翻訳するか	210
	6/3	奥村 進	工学部教授	環境調和型ものづくり	207
	6/10	岩谷澄香	人間看護学部教授	次代を産み育てるサイクルにある女性の健康支援	179
	6/17	面矢慎介	人間文化学部教授	道具学から見た家庭用機器のデザイン進化	184
				合 計	1023
テーマ：環境負荷低減を目指した廃棄物からのものづくり					
平成 18 年	10/18	山根浩二	工学部教授	天ぷら鍋から燃料タンクへー廃食用油バイオディーゼル燃料で地球を救える！	58
秋期	11/25	徳満勝久	工学部助教授	95 以上の廃棄物を含むリサイクルプランターの開発ー材料技術で環境保全に貢献するー	56
				合 計	114
H18 移動	12/9	東幸代	人間文化学部講師	江戸時代の地震と近江国 （会場：米原市）	93
平成 19 年	5/19	山田明	人間看護学部教授	新型インフルエンザの現状とそなえ	69
春期	5/26	布野修司	環境科学部教授	カンボンの世界ーアジアの居住問題を考えるー	54
	6/2	熊谷勉	工学部教授	色とフォトン（光子）	54
	6/9	地蔵堂貞二	国際教育センター教授	中国白話小説の作者とことばー『西遊記』と『金瓶梅』を中心にー	54
	6/16	田中俊明	人間文化学部教授	古代の日朝関係を考える	48
				合 計	279
テーマ：認知症予防とケア					
平成 19 年	11/3	堀井とよみ	人間看護学部	認知症の予防と早期発見	180
秋期	11/24	堀井とよみ	人間看護学部	軽度認知症の悪化予防	163
	12/8	畑野相子	人間看護学部	認知症ケアの常識	151
		合 計			494
H19 移動	2/23	福本和正	元環境科学部教授	滋賀県の地震環境と建築の耐震性について （会場：高島市）	39
平成 20 年	5/17	灘本知憲	人間文化学部教授	冷え性と食品ー漢方入門ー	116
春期	5/24	近藤隆二郎	環境科学部准教授	モヘンジョダロとマチュピチュにみる水と暮らし	86
	5/31	稲葉博美	工学部教授	エレベータ：扉の裏側で日々進化するビルの大動脈	64
	6/7	寄本明	国際教育センター教授	運動習慣の改善とメタボリックシンドローム予防	100
	6/14	豊田久美子	人間看護学部教授	あなたがガン患者・家族になった時：看護学からのメッセージ	79
				合 計	445
テーマ：びわ湖は私たちに問いかけている					
平成 20 年	11/15	遠藤修一	滋賀大学教育学部教授	地球温暖化とびわ湖	79
秋期	11/22	浦部美佐子	環境科学部准教授	びわ湖の貝の昔と今	62
	12/6	三田村緒佐武	環境科学部教授	びわ湖を守るための循環哲学	60
		合 計			201
H20 移動	3/14	堀井とよみ	人間看護学部教授	認知症の予防と早期発見 （会場：野洲市）	60
平成 21 年	5/16	細馬 宏通	人間文化学部教授	絵はがきと地図で見る彦根	74
春期	5/23	(奥健夫)	(工学部教授)	新型ｲﾝﾌﾙｴﾝｻﾞ にて中止	中止
	5/30	須戸幹	環境科学部准教授	琵琶湖と農業と農薬	71
	6/6	w.k. クリンガー	国際教育センター准教授	Sugata Sanshiro’s Path of Loyalty 姿三四郎の忠孝の道	59
	6/13	比嘉勇人	人間看護学部教授	ストレスとこころの健康	94
				合 計	298
テーマ：環境共生を考える					
平成 21 年	11/21	奥健夫	工学部教授	光とエネルギー	48
秋期	11/28	浜端悦治	環境科学部准教授	東アジアの浅水湖沼の現状	32
	12/5	八木一行	農業環境技術研究所研究員	水田からのメタン発生と地球温暖化	48
				合 計	128
H21 移動	12/12	京樂真帆子	人間文化学部教授	近江の女性たち（会場：栗東市）	33
平成 22 年	5/15	南和広	国際教育センター准教授	健康寿命と運動	118
春期	5/22	大橋松行	人間文化学部教授	地方分権改革の行方ー市町村合併から道州制へー	71
	5/29	倉茂好匡	環境科学部教授	琵琶湖とその周辺に散らばるゴミの話	84
	6/5	中川平三郎	工学部教授	ミクロの世界のものづくりー日本を救う加工技術ー	86
	6/12	沖野良枝	人間看護学部教授	尊厳ある生と死	100
				合 計	459
テーマ：近江の歴史と文化					
平成 22 年	10/23	水野章二	人間文化学部教授	棚田と里山の歴史を考える	71
秋期	10/30	林博通	人間文化学部教授	琵琶湖湖底遺跡の謎を解く	75
	11/6	市川秀之	人間文化学部准教授	近江の祭とムラを探る	58
				合 計	204
平成２２年度移動講座はなし					

5-3. 近江楽座採択プロジェクト一覧

	年度							プロジェクト名	チーム名
	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22		
1	○	○	○					リバーウォッチング　in 安曇川	リバーウォッチング　in 安曇川
2	○	○	○	○	○	○	○	市民および医療に携わる人々とのふれあいを通して志向する未来看護塾	未来看護塾
3	○	○						吾川村下名地区地域活性化事業	ドラマ下名 II
4	○	○	○	○	○	○		発信基地　in 朽木の森	くつきチーム (H16,17:KTT)
5	○	○						「蔀戸のある家」の保存と活用	日牟礼楽座
6	○	○						「土戸のある町家」の保存と活用	七曲がり楽座
7	○	○	○	○	○	○	○	Taga-Town-Project(TTP)	TTP
8	○	○						三津・海瀬町市民農園プロジェクト (H16：三津・海瀬町土地利用計画)	RE CULTIVATORS (再耕築するものたち)
9	○	○	○	○	○	○	○	とよさと快蔵プロジェクト	とよさと快蔵プロジェクト
10	○	○	○			○	○	アートフォーラム 2006・・・環境とアートのまちづくり in 近江八幡（H17:BIWAKO ”近江八幡”ビエンナーレ／H21：ART FORUM 2009 DIG’S　- 近江八幡を掘り出せ！ -)	アートフォーラム 2006 実行委員会：絆 (H17:BIWAKO ビエンナーレ県大学生実行部／H21：ART FORUM 2009 DIG’S　- 近江八幡を掘り出せ！ -)
11	○	○	○					社会資本としての集住体プロジェクト	ちーむ　　はっけい
12	○	○	○	○	○	○		犬上川竹林プロジェクト（H21：エコキャンパスプロジェクト）	エコキャンパスプロジェクト 生き物部会（H21：自然環境伝播計画）
13	○	○	○	○	○	○	○	エコキャンパスプロジェクト木楽部会 (H17：おきくら)	エコキャンパスプロジェクト 木楽部会
14	○	○	○	○				ツナギ創造プロジェクト (旧：中山道コンシェルジェ養成プロジェクト)	C3 (Community Concierge Consultant)
15	○	○	○	○	○	○	○	限界集落の村おこし (H17：廃村「男鬼」の村おこし)	男鬼楽座
16	○							わっしょい湖東(湖東地域広域観光デザインプロジェクト)	木匠塾
17	○		○	○	○		○	障害児・者 自立支援・共生社会プロジェクト	ボランティアサークル Harmony
18	○		○					コノマチ助隊 (H16：Q＋)	ＡＣＴ（Q 座）
19	○							初めての農家	チーム農しん
20	○							Nio Project（内湖に調和した環境提案）	Nio (Naiko in Occupation) Project
21	○							信楽グランドデザイン調査開発事業	マニフェスト信楽
22	○							上丹生地域アイデンティティ計画	職人塾’上丹生’
23	○							下着関連新製品開発デザイン事業	Ｆ．Ｕ．Ｌ彦根
24	○							伝統創作仏壇デザイン開発事業	彦根仏壇デザインチーム
25		○	○	○				再興湖東焼プロモーション事業	ＵＴＳＵＷＡＤ
26		○						いっそ磯	いっそ磯
27		○	○	○	○	○	○	Ｌｅｔ’ｓ　複合	廃棄物バスターズ
28		○						描こう八坂生活絵巻！　地域の「携帯博物館」プロジェクトー 2nd stage	耳の会
29		○						環境フェスタ　in 祇王	P-S（ピース）
30		○						農村エコツアー　～知農考獣～	けもの SOS
31		○						愛知川宿新生プロジェクト	新生愛知川宿
32		○	○	○	○	○	○	菜の花エネルギーネットワーク（H17：菜の花エネルギー教育ネットワークの構築 H21：菜の花エネルギー）	菜の花エネルギー
33		○						ニュースポーツとまちづくりプロジェクト	NEW Spozza CLUB
34		○						琵琶湖の今と昔	水辺塾
35		○						あいせい田んぼの生き物プロジェクト	あいせい田んぼの生き物プロジェクト
36			○	○	○	○	○	いかして民家？（「蔀戸のある家」の保存と活用･「土戸のある町家」の保存と活用を統合）	古民家楽座
37			○	○	○	○	○	Living Design FASHION SHOW	Living Design
38			○					ひこねブランド	ユニットＬ・Ｆ
39			○					ヒコネベロタクシープロジェクト	輪ダチ
40				○	○	○	○	信楽人 -shigaraki field gallery project	信楽人

	年度							プロジェクト名	チーム名
	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22		
41				○	○	○		Oumi Food Project	Oumi Food Project
42				○				人と自然を繋げる会	エコキャンパスプロジェクト
43				○	○			八日市屋台プロジェクト（プロジェクト YY)	わいわい楽座
44					○			稲枝 Cotton Project	Cotton Project
45					○	○		近江中山道百彩プロジェクト	百彩
46					○			ソーラーベロタクシー	ソーラーハンター
47					○			彦根人力舎ー彦根地場産業発信計画ー	リキシャ
48					○			「もったいない帳」を用いたスローライフプロジェクト	もったいないプロジェクト
49						○		守山宿だるまそばプロジェクト	守山宿だるまそばプロジェクト
50						○	○	灯りんちゅ ～リサイクルキャンドルでスローな夜を～	あかりんちゅ
51						○	○	七曲り仏壇職人にまつわる 絵本作成プロジェクト	七曲りでいっちょやったるか !!
52						○	○	とよさらだプロジェクト	とよさらだプロジェクト
53						○	○	一姓（いっしょう） ～農業を県大にツナげて元気にする！～	一姓（いっしょう）
54						○	○	石山アートプロジェクト	いしアート
55						○		ケンダイ映画館をつくる会	ケンダイ地球座
56						○		エコ民家倶楽部＋	キネ・コモン　石寺
57						○		近江楽座売り込み隊　※協働プロジェクト	近江楽座を全国区へ
58				○				湖北地域における都市と地方の交流居住・移住促進事業 - 情報発信ツールの企画・制作　※ B プロジェクト	近江楽座学生委員会
59				○				湖北地域における都市と地方の交流居住・移住促進事業 - 地域と連携したモニター・ツアー (お試し居住) の企画実施　※ B プロジェクト	古民人
60				○	○			湖北地域の古民家で田舎暮らしをするための移住などを支援する活動ー空き民家の調査・活用と都市農村交流事業の企画・実施　※ B プロジェクト	木之本楽座
61					○			湖北地域の古民家で田舎暮らしをするための移住などを支援する活動ー古民家での田舎暮らし体験プログラムの企画、実施　※ B プロジェクト	長浜楽座
62					○			高島市における若者が輝くまちづくり調査活動ー高島における若者の生活スタイルに関する調査および発信活動　※ B プロジェクト	Area+Design
63						○		おうみの豊かな暮らしかた広報プロジェクト　※ B プロジェクト	dat lab
64							○	Shiga 食育推進プロジェクト	県大地域食育推進隊
65							○	荒神山ロックフェス 2010	荒神山ロックフェス実行委員会
66							○	湖北　戦国プロジェクト	長浜ＢＡＳＡＲＡ
67							○	おとくらプロジェクト	おとくらプロジェクト
68							○	バンデイラ・ジ・オウロ	チーム・バンデイラ・ジ・オウロ

公立大学法人　滋賀県立大学　地域づくり教育研究センター　年報
（平成 18 年度～ 22 年度）

平成 23 年 3 月　発行

公立大学法人　滋賀県立大学　地域づくり教育研究センター
〒 522-8533　滋賀県彦根市八坂町 2500
TEL：0749-28-8210
FAX：0749-28-8473
E-mail：chiiki_koken@office.usp.ac.jp
HP：http://ccdp.usp.ac.jp

公立大学法人　滋賀県立大学　地域づくり教育研究センター

〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町 2500

TEL 0749-28-8210

FAX 0749-28-8473

E-mail chiiki_koken@office.usp.ac.jp

HP http://ccdp.usp.ac.jp/